

CNSの病態モデルを拡充

初期段階から手厚いサポート

トランスジェニックグループの新薬リサーチセンターは、中枢神経系疾患（CNS）の動物病態モデルのラインナップを拡充し、製薬企業が開発する新規開発候補の早期薬効評価に役立つ。トランスジェニック社が作製した遺伝子組み換え動物をもとに、新薬リサーチセンターが多種の病態モデルを用いた薬効評価試験を実

施することで、医薬品開発の初期段階からサポートする体制を強化していく方針。新薬リサーチセンター中央研究所研究本部薬理グループの野々村徹氏は、「製薬企業が挑戦しているアンメットメデイカルニーズが高い疾患領域においても病態モデルを用いた試験を行えるようにしたい」と語る。



野々村氏

点を有する。

中でも、昨年度二桁成長を果たした薬効・薬理試験評価が成長ドライバーだ。トランスジェニックの遺伝子改変マウスや高親和性・特異性を示すマウス抗体の作製技術を武器に、自社で作製したモデルマウスを使った薬効・薬理試験を行える事業間シナジーを創出していく。

知症、精神・神経疾患の病態モデルを用いた新たな薬効評価系を立ち上げた。6月には、トランスジェニック社が大阪市立大学の森啓特任教授らが開発したADモデルマウスである、APP^{osk}マウスや野生型TAUトランスジェニックマウスに関するライセンス契約を締結した。アミロイドβオリゴマーによるAD発症の病態とそれをターゲットとする治療法の研究、創薬研究に役立つ。

野々村氏は、新薬リサーチセンターが持つ薬効・薬理評価の専門性が、今後開発が活発化すると予想される再生医療や個別化治療薬にも生かされると読む。「例えば、再生医療であれば根治療法としての評価が必要になり、従来の手法では不十分で、別の方法を組み合わせることも考えなければならぬし、個別化治療薬では群平均での薬効評価も重要だが、平均値に隠れた個体毎の挙動値をどう評価するかが重要」と柔軟に対応していく方向性を示す。

トランスジェニック社だけではなく、遺伝子解析や分子病理解析診断に強い「ジェネティクス社」もグループ会社に機能として備える。「特徴的な技術を持つ会社が隣に揃っている強みを生かすことで、製薬企業に対し開発戦略を提案していきたい」と野々村氏。研究者のアイデアを出発点とした「現場視点」で競合他社と差別化を図る方針。

新薬リサーチセンター

トランスジェニックグループのCRO事業は、昨年度売上が前期比4・7%増の11億5000万円、営業利益が90%増の

2億4430万円と増収大幅増益を達成した。今年度からスタートした中期経営計画では最終年度の20年度に売上高14億6000万円、営業利益3億5000万円への拡大を目指している。

その中核となる新薬リサーチセンターでは、医薬品や食品の臨床試験や非臨床試験を受託している。非臨床試験については、齧歯類など小動物を使った試験を実施している北海道の中央研究所と、サルを試験を担当する神戸研究所の二つの拠

国内製薬企業が研究開発の重点領域とする中枢神経系領域では、アルツハイマー病（AD）や認

7月には、産業技術総合研究所のバイオメディカル研究部門生体分子創製研究グループの小島正巳上級主任研究員が開発した精神・神経疾患モデルマウスに関する

は不十分で、別の方法を

を